



赤目まちづくり委員会・市民センター

たきこちゃん通信 11

2020年
月号

発行/赤目まちづくり委員会(赤目市民センター)〒518-0465名張市赤目町丈六238-1 電話/FAX63-0329 E-mail/akame-ko@emachi-nabari.jp

喜びと希望の持てる、町づくりを。

赤目まちづくり委員会 会長 亀本和丈

晩秋のこの頃、地域住民の皆様にはご健勝の段心よりお喜び申し上げますと共に、日頃の御協力に対して改めてお礼と感謝を申し上げます。

今年に入り世界中を騒がした新型コロナウイルスにより感染拡大防止に対する意識の変化は老いも若きも地域住民すべてが改善し、また生活様式についてもマスクの着用は常識に、手洗いや消毒はむろん検温・記名についても当たり前と思われる昨今に改めて感心致しておりますと共にこの変化の徹底が感染の拡大防止の根底であると改めて感謝申し上げます。

今後下半期に於ける私達の行事も出来得る限り内容を検討しながら実施の方向で考えあくまでも健康で健全なまちづくりを目指して行きたいと思っております。

今回 15 地域で唯一赤目が市民センターまつりを実施し 5 日間と云う開催期間延長の中で述べ 400 人の参加がありました。中身をみますと平均で 1 日の来場者は 80 人前後であり、人数制限すらかけてないにも関わらず、この内容を見た時地域皆さんの三密に対する配慮と結果に主催者一同驚きと関心を致した処です。

今後とも更なる益々のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

赤目地区ミニ集会 更生保護女性会
2021年1月16日1時半より市民センター大会議室
テーマ「地域での見守り活動を通じて」講師 堀内節生(地域振興推進部)

名張市社会福祉協議会会長表彰受賞

団体・ふれ愛サロン「ひまわり」/個人・湊美城子さん表彰



名張全世帯型プレミアム付・子育て応援商品券販売

“みんなで支えよう！名張のお店”
全世帯型プレミアム付商品券・子育て応援商品券が
11月2日～利用開始！ぜひご利用ください！！

対象者：名張市に住民票を有する世帯主の方
(子育て応援商品券は18歳以下の児童がいる世帯の世帯主の方)

※全世帯型プレミアム付商品券は引換が必要です
引換期間：令和2年11月2日(月)～令和2年12月15日(火)まで
引換場所：名張市内郵便局11か所(簡易郵便局を除く)

引換券をお忘れなく！！

◎なお、子育て応援商品券は11月2日以降、対象世帯へ簡易書留にて直接お届けさせていただきます。(申請や引換等の手続きは不要です。)

利用期間：令和2年11月2日(月)～令和3年1月31日(日)まで
問い合わせ先：名張商工会議所 (TEL:0595-63-0080)

近鉄・赤目口駅トイレ清掃員 急募!!

赤目口駅前のトイレ掃除(約40分)一日2回(午前・午後)を担当して頂きます。1か月交代で、1か月間毎日の作業になります。報酬1回600円 男女・年齢不問、真面目な方 履歴書持参・後日面接等連絡致します。

名張市観光課・赤目まちづくり委員会 TEL. 63-0329

赤目溪谷『幽玄の竹灯(たけあかり)』を開催中

10月24日から赤目四十八滝溪谷ライトアップが開催中。放置された竹林の間伐材を有効利用し、観光閑散期の集客増に繋げることができたらと、『なばり竹あかり SDGs プロジェクト』地域と協働循環型社会を目指して、名張市・名張市エコツーリズム推進協議会共催のもと開催されている。メイン会場は、日本サンショウウオセンターから不動滝。

大型LEDライトと1000本に及ぶ竹灯、地元の名産や流行グルメの夜店、赤目自然歴史博物館での竹灯の展示・即売会など。また竹灯籠、苔テラリウム、ハーバリウムなどの手作り体験の開催予定。「幽玄の竹灯」は、2021年1月31日まで午後4時半～8時まで開催。入場料大人600円・子供(小・中学生)300円(入山料込み)



ELP 健康講座(健康福祉部)を楽しく開催。

10/15(木)市民センター大会議室で健康福祉部主催の第1回ELP(エンジョイ ライフ プロジェクト)健康講座を開催。

赤目まちづくり委員会が中心となって、「あかめまちじゅう元気プロジェクト」と名を打ちその一環として、赤目まちの保健室・地域包括支援センターと一緒にコロナウィルス感染症予防と健康づくりのための筋力運動、脳トレを多くの参加者と学習した。



赤目歴史散策・男の料理教室を楽しく開催

「赤目と伊賀竜口」の歴史散策10/23開催(参加16名)

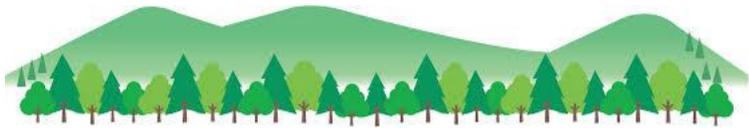


男の料理教室 10/30開催(参加限定13名)



平日の開催ですが、お気軽にご参加ください。

赤目トレッキングの参加者募集中



赤目竜神山トレッキング!

旧赤目小学校の校舎にも歌われた赤目の竜神山。この赤目のシンボル竜神山を、清々しい晩秋の頃にトレッキング会を開催いたします。皆様のご参加お待ちしております。(参加無料、要事前申し込み)
※竜神山(高嶺山)…標高466.2m。

(新型コロナウイルスの感染拡大リスクの高まり等に十二分な留意が必要ですが、屋外活動として実施致します。)

- ・開催日 11月26日(木)
(雨天・小雨の場合は、トレッキングコースにつき中止と致します。)
 - ・集合場所 赤目市民センター
 - ・集合時間 午前9時受付開始 午前9時30分出発
 - ・下山予定 赤目市民センターに午後3時頃到着予定
 - ・行程 赤目市民センター→星川八幡神社→星川石切場跡(線刻磨崖仏)→七つ池(昼食)→竜神山三角点→竜神さんの祠→高善山からの眺望→大岩→柏原上出→赤目市民センター
 - ・参加費 なし
 - ・持ち物 弁当、おやつ、水筒等、マスク、シート
 - ・申込み 11月16日(月)までに、赤目市民センターへ電話にてお申し込みください。
※受付時間/市民センターの業務時間内
(平日の9時～12時13時～16時)
電話/63-0329
- ※トレッキングに適した服装で参加してください。
※健康状態や体調を十分に考慮したうえで、ご参加ください。
※駐車場は赤目市民センターをご利用ください。

ご案内!! 「丈六区健康教室」開催

※簡単なスクエアステップで、身体と脳の活性化を!

日時 11月17日(火)10時より
場所 丈六集会所

※マスク着用をお願い致します。
なお新型コロナウイルス感染防止対策のため中止になることがありますので、ご注意ください。

赤目駐在所建替え工事中

令和3年3月11日まで建替え工事になります。
ご用件がある場合は、名張署 62-0110 まで

11月2日～12月6日までの予定

月	火	水	木	金	土	日
11/9	10	11 ふれあいサロン	12	13	14	15 赤目みんなの運動会 中止
16	17 丈六・健康教室	18	19	20	21 名張市総合防災訓練	22
23	24 	25 ふれあいサロン 忍たま広場	26 赤目竜神山トレッキング	27	28	29
30	12/1	2	3 市民センター 消火避難訓練	4	5 赤目まちづくり 委員会理事会	6

※赤目市民センターでは、コロナ対策として、検温・マスク着用・消毒・換気、名簿の作成など、3密(密集・密接・密閉)を守りつつ運営しています。しかしながら状況に応じ、中止・延期になる場合がありますので、ご注意お願い致します。

※丈六区健康教室、名張市総合防災訓練、赤目竜神山トレッキングの詳細は、配布のチラシをご覧ください。

12月の行事予定



- ★12/9(水) ふれあいサロン
- ★12/17(木) サンサンカレー、ELP 健康講座
- ★12/19(土) 旅ステサポーター研修会
- ★12/23(水) ふれあいサロン、忍たま広場
- ★12/29(火) 赤目歳末警戒
- ★12/29(火)～1/3(日) 年末・年始休館日
- ★1/11(月・祝) 子ども凧揚げ大会 ゆめ広場

あかめ里山文化保全会の設立に伴い、会員募集!

環境部会では、赤目地域環境整備の一環として竜神山・柏原城址跡等の周辺里山の保全活動の事業を立ち上げました。令和2年9月に三重県緑化推進協会の認可、今後の整備活動を推進して下さるメンバーを募集します。
環境部会・あかめ里山文化保全会 宮本 TEL.63-0329

Vol. 10 隠れた名所…赤目文化遺産 (各区・地域の名所・名品を募集しています。)

滝川(たきがわ)の清流

前号は、まさに瀧自慢であったが、今回は川・水自慢を。赤目を流れる唯一の河川・滝川(12.3km)は、赤目滝から丈六に流れ柏原・木戸口で梶川が合流。ゲンジボタル「丈六ボタル」の生息地としても知られている。

旧村名「滝川村」もこの川に由来。平安時代には、滝川を挟んで中村(丈六・相楽・檀・星川・柏原及び青蓮寺)と矢川(一ノ井と矢川)の2地区に別れていた。そのため川の名称も平安・室町時代は、「矢川」。江戸・明治初期は、「赤目滝川」と称し、明治中期より「滝川」となる。

同じように町名も赤目町になる前は、町村制の施行で明治22年(1889年)4月より名張郡滝川村となったが、明治29年(1896年)には三重県名賀郡滝川村に変更。昭和29年(1954年)市制施行により名張市が発足と共に赤目町となる。



昔から、「水を制するものは国を制す」と言われてきた。戦国時代の武田信玄は、暴れ川を治め、新田開発することで富国を目指した。滝川下流の柏原区では、水田・稲田地は勿論、家庭内に水を取り入れ炊事・洗濯・鮎の飼育など、かつては水車を回し製粉・精米や製紙業(和紙の製造)を発展させた。

特に手すき和紙は、上野地方の特産である和傘の製造に大量に使用され暮らしを潤した。昭和8年には「伊賀傘商工業協同組合」が設立され、上野の町で生産業者125軒、従業員1600人超、年額200万円、全国で1・2位を争い、昭和10年ごろには年間300万本も作られていた。戦後昭和30年以降は、外国から入ってきた「アンブレラ」なる「洋傘」に押されて、伊賀の「番傘」は廃れてしまった。和傘は、すたれども日本人にとって心豊かな故郷の原形は、いつの時代もお米の美味しい、水のきれいな赤目と云えそうだ。